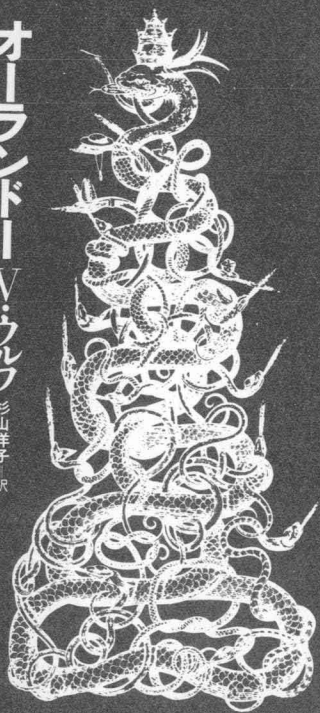




紀田順一郎 荒俣宏

責任編集

世界幻想文学大系 39



オーランドーV・ウルフ
杉山洋子 訳

世界幻想文学大系……責任編集Ⅱ紀田順一郎＋荒俣宏
第三十九卷

オーランドー

昭和五八年一〇月二五日印刷 昭和五八年一月五月初版第一刷発行

著者 V・ウルフ

訳者 杉山洋子

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨三―五―一八 郵便番号一七〇 電話〇三―九一七―八二八七 振替東京五一六五二〇九

造本者 杉浦康平＋鈴木一誌 協力Ⅱ佐藤篤司

挿圖 渡辺富士雄

印刷所 凸版印刷株式会社＋セイユ写真印刷株式会社

製本所 凸版印刷株式会社

定価 二、二〇〇円

●―落丁本・乱丁本はおとりかえします

杉山洋子すぎやまようこ

一九三〇年、台北生れ。

関西学院大学文学部卒。

現在、同大学教授。

専攻、英米文学。

主要著訳書――

『虹と花崗岩―ヴァージニア・ウルフ論』

(英文)北星堂書店、一九七三年。

『ファンタジーの系譜――妖精物語から

夢想小説へ』中教出版、一九七九年。

キャベル『夢想の秘密』国書刊行会、

一九七九年。

ダンセイニ『牧神の祝福』月刊ペン社、

一九八一年。

世界幻想文学大系——第三十九卷

オーランドー——伝記
V・ウルフ——杉山洋子 訳

68838



目次

7 オランダ——伝記

9 序

12 第一章

50 第二章

90 第三章

114 第四章

168 第五章

196 第六章

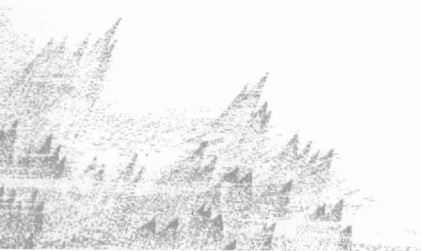
250 案

253 隠し絵のロマンス伝記的に……杉山洋子

少年オランダー



オーランドー伝記



ヴィタ・サックヴィル・ウエストへ

orlando

序

この書物を書くにあたって多くの友の助けを借りました。そのうちの幾人かは既に亡く、有名すぎてそれと名指すのも恐れ多い、とはいえ、デフォール、サー・トマス・ブラウン、スターン、サー・ウォルター・スコット、マコリー卿、エミリー・ブロンテ、ド・クインシー、ウォルター・ベイター——心に浮ぶまま挙げてみても、こうした人たちの恩恵をたえず蒙らずには、われわれ本を読むことも書くこともできません。他の友人は存命であり、まさにそれゆえに、各人各様に有名なのでしょうか、恐れ敬うというほどではありません。なかんずく、C・P・サンガー氏に不動産法についてご教示願わなかったら、この本は書けませんでした。シドニー・ターナー氏の広汎かつ特殊な学識のお蔭で、嘆かわしいへまを、願わくば、やらずに済みました。アーサー・ウェイリー氏の中国語の知識にどれほど計り知れずあやかったかは著者のみに言えるところです。ロポコヴァ女史(J・M・ケインズ夫人)はいつでも私のロシア語を直して下さいました。私が絵を描くことについて多少なりと理解できるのは、ひとえにロジャー・フライ氏のまたとない好意と想像力のお蔭です。他の分野ではわが甥ジュリアン・ベル氏の厳しくはあるが類稀な洞察力に充ちた批評に報いることができていたら幸いです。M・K・スノードン嬢の倦むことを知らぬハロゲイト及びチュルテナムの古文書研究は骨

折損に終わったとはいえ、大仕事でありました。この他、それといちいち指摘する暇もないほど多くの友人のお世話になりました。以下、せめてその名を挙げさせていただきます。アンガス・ダヴィッドソン氏、カートライト夫人、ジャネット・ケース先生、バーナース卿（エリザベス朝の音楽について貴重なご教示を頂きました）、フランシス・ピリル氏、私の弟エイドリアン・ステイーブン博士、F・L・ルーカス氏、デズモンド・マッカーシー夫妻、かの鼓舞激励に長けた批評家であるわが義兄クライヴ・ベル氏、G・H・ライランズ氏、コルフアックス令夫人、ネリー・ボクソール嬢、J・M・ケインズ氏、ヒュー・ウォルポール氏、ヴァイオレット・ディキンソン嬢、エドワード・サックヴィル・ウエスト氏、セント・ジョン・ハッチンソン夫妻、ダンカン・グラント氏、ステイーヴン・トムリン夫妻、オットライン・モレル令夫人及び夫君モレル氏、わが義母シドニー・ウルフ夫人、オズバート・シットウェル氏、ジャック・ラヴェラ夫人、コリー・ベル大佐、ヴァレリー・テイラー嬢、J・T・シェバード氏、T・S・エリオット夫妻、エセル・サンズ嬢、ナン・ハドソン嬢、わが甥クエンティン・ベル氏（小説作りにおける長年の貴重なる協力者）、レイモンド・モーティマー氏、ジェラルド・ウエズリー令夫人、リットン・ストレイチー氏、セシル子爵夫人、ホープ・マリーリス嬢、E・M・フォースター氏、ハロルド・ニコルソン氏、わが姉、ヴァネッサ・ベル——と、このリストは更に長くなりそうなのですが、これでもう素晴らしく立派なものになりました。これは私にとってこの上なく楽しい思い出を呼び起してくれるのですが、一方、読者の皆様は期待しすぎて、本を読んでもからがっかりなさいといけません。というわけで、以下の方々に對する感謝をこめて、この序を終えることに致します。大英博物館及び公記録保管所の方々のいつに変わらぬ御好意に感謝します。姪のアンジェリカ・ベル嬢は他の誰にもできない仕事をしてくれました。わが夫は辛抱強く終始私の研究調査を援助してくれ、

その該博な知識のおかげでこの書物に幾許かの歴史的正確さを持たせることができました。最後に、お名前と住所を失くしてしまったのですが、アメリカの一紳士に感謝したく思います。この方は寛大にもわざわざ、無償で、私のこれまでの作品の句読点、植物、昆虫、地理及び年代の誤りを沢山直して下さいました。この度のこの機会にも相変りませず同じ労をおいとい下さるよう願っております*1。

*1—この序に注をつけると本文の何倍にもなるので、大部分割愛せざるをえない。

冒頭の大作家はさておき、「存命」(少くとも当時は)であった人々の多くはブルームズベリ・グループの仲間を中心とする著者の友人たちである。

例えば、最初に出てくるサンガー氏は、

『風が丘』の時間的空間的構造についての画期的な小論を書いた人であり、

『源氏物語』の訳者アーサー・ウェイリーや余りにも有名なT・S・エリオット、伝記作家リットン・ストレイチー、

『印度への道』の著者E・M・フォースター、経済学者ケインズの名も見える。

ネリー・ボクソールは長年ウルフ夫妻のcockを動めた。

甥のクエンティン・ベル(一九一〇—)はウルフの人気を著しく高めた『ヴァージニア・ウルフ伝』二巻(一九七二)の著者、姉で画家のヴァネッサ・ベルの娘アンジェリカ・ガーネット(一九一八—)は『オーランドー』

初版に付したイラストの写真で、ロシアの姫君サーシャに扮している。

夫は、社会評論家・文筆家のレナード・ウルフ氏(一八八〇—一九六九)。

第一章

彼は——といつても、当時の服装からしてなにか性別定かならぬ様子ではあるのだが、男であることは間違いない——垂木たるぎにぶら下げてあるムーア人の首に向つて剣を振るっているところであつた。その首は、色といい、まあ形の方も、頬はくぼみ、椰子の実の如きこわ剛くかさかさの毛が一握りほどくっついてゐるが、古ぼけたフットボールさながら。オーランドーの父か祖父かが、アフリカの荒野で月光を浴びて仁王立ちになつたでかい異教徒の肩から打ち落した首だ。今それが、おのれを手に掛けた英国貴族の広大な館やかた・iの屋根部屋を絶え間なく吹き抜ける微風に吹かれて、微かに絶えず揺れ続けていた。

オーランドーの祖先は代々、水アスフォデル仙咲く野や岩だらけの原野、名も知らぬ川に洗われる曠野を駆けめぐり、数知れぬ敵のさまざまの毛色の首を打ち落し、持ち帰つては垂木に吊るしておいたのであつた。ぼくだつてやるぞ、とオーランドーは心に誓つた。とはいへ、齡未よわいだ十六歳の身であれば、父と共にアフリカやフランスの地に赴き馬を駆るには若すぎたから、こうしてそつと、孔雀の庭の母上の傍を離れ、屋根部屋にやつて来ては、突いたり刺したり難いだり、剣を振り回すのであつた。時たま縄を切つてしまい、首がどすんと床に落ちると、元通り吊つてやらねばならぬ、で雄々しげにやつと手の届くほどの高さに括りつけると、敵は

勝ち誇りしぼんだ黒い唇でにやりと歯を剝く。首はゆらゆら揺れた、というのも、オーランドーが最上階に住むこの館はまことに広大なので、風さえ囚われたまま、冬といわず夏といわず、あっちへ吹きこっちへ吹きしていたのである。狩人の群を織り出した緑の壁掛が絶え間なく揺れていた。オーランドーの祖先はそもその始めから高貴の身分。頭に宝冠を戴き、北方の霧の中からやって来たのであった。それゆえ、窓は巨大な紋章のステンド・グラスで、陽光が差すと窓枠の黒い影が部屋に落ち、黄色の陽だまりが床に市松模様を描く。オーランドーは今、紋章の黄豹の身体の真中に立っていた。窓を押し開けようと窓枠に手をかけるや、その手は蝶の羽さながらに赤、青、黄に染まる。というわけで、象徴好きで、象徴の解説も得意な人間であれば、すんなりした脚、凜々しい身体つき、しっかりした肩がそっくり紋章の光を浴びて色鮮かに飾られており、一方、窓を開け放ったオーランドーの顔はまさに陽光に輝いていることに注目するであろう。かくも率直かつ物思わしげな顔はまたとあるまい。このような子息の母こそ幸いなるかな！ このような人の生涯を記す伝記作家こそ更に果報者だ！ 母は悩み一つなく、伝記作家は小説家、詩人の手助けなど無用というもの。記録係として、偉業につぐ偉業、栄光につぐ栄光、天下の要職という要職を欲しいままにする主人公の後を追うてゆきさえすれば、やがては主人公と共に望み通りの最高の座に到達するのだ。見たところ、オーランドーはまさにそのような生涯にふさわしき人と読める。紅い頬は桃の産毛に掩われ、口元の柔毛^{うぶげ}とて頬のそれより心持ち濃いほどか。唇は小さく微かに反って、綺麗なアーモンドの如く白き歯が覗いている。矢の如く真直ぐでやや短かい鼻、髪黒く、小じんまりとかわいい耳。しかしながら、まこと、額と目に触れ

・11 英国ケント州セブノークスにあるノール館をモデルとする。

一五六六年から一九四七年までサックヴィル家の所有であった。詳細は「あとがき」を参照。

ずしてこの少年美を語り尽くしたとはいえぬ。まこと、額と目なら、人間誰しも事欠かぬ。しかしながら、窓辺に立つオーランドーをひと目見れば、その目は露に濡れし董^{すなわ}の色、大きくこぼれそうに潤んでつばらに見開き、額は、滑らかな楕円のメダルの如きこめかみに挟まれて盛り上る大理石の円屋根^{ドーム}さながら。などと、目と額をちらと見ただけで、伝記作家はもうこんなにのぼせ上って絶讃してしまいます。目と額を一瞥するなり、他に望ましからざる点が千あっても目を瞑^こる、大体よき伝記作家は主人公の短所を無視するものなのです。さて、まことに麗しき緑衣の母上が孔雀に餌をやろうとて、小間使のトゥイチュットをお供に庭にお出ましのお姿を見て、オーランドーは戸惑う、小鳥や木々を眺めれば心が踊る。暮れなずむ空、ねぐらに向うみやま鴉を見ては、死に憧れた——というふうに、目に映るものごとく、庭園の物音、槌で叩く音、木を切る音とあいまって、オーランドーの広やかな頭脳へと螺旋階段を昇り昇って情熱や情緒をかき立てかき乱したのであった、といっても、情熱や情緒など、よき伝記作家は苦手なのです。が、話を続けると——オーランドーはおもむろに窓から首を引っ込めると机に向い、毎日今時分の日課なので半ば無意識の仕草で「エセルバート・五幕の悲劇」とラベルを貼ったノートを取り出すと、古い汚れた驚ベンをインキに浸したのであった。

彼はたちまち十ページかそこらを詩で埋めつくした。確かに達者だ、が、抽象的だ。劇中人物は〈悪徳〉、〈罪惡〉、〈不幸〉などで、この世に在る筈もない国々の王や女王が登場する。忌わしき陰謀で全員破滅、気高き情緒は溢れんばかり、せりふはといえばおよそ普段作者自身の口から出るような言葉とは似ても似つかぬ。とはいえ、これすべてすらすると美しく書かれており、作者は未だ十七歳未満、十六世紀はまだまだ終らないことを考慮に入れば、相当な出来栄ではあった。しかしながら、オーランドーはやっと筆を置いた。若き詩